



## 謹賀新年

本年もよろしくお願い致します。

令和四年、新年明けましておめでとついでいます。

大雪でスタートした令和四年の新春となりましたが、皆様には、連日の雪かき作業でお疲れを出されていませんか？新春のお慶びと併せてお見舞い申し上げます。

一昨年、昨年とコロナ禍により社会の動きが停滞し、地域コミュニティも疎遠になってしまった二年間でしたが、ワクチン接種が進められる中、感染者数も大幅に低減し、昨年末には、福祉部会のご尽力によりクリスマス会を開催することが出来ました。しかしながら、その後、オミクロン株による感染拡大が全国的に広がっており、今後の動向によっては、まだまだ本調子に活動が出来そうではありませんが、何とか活動が再開出来ることを祈るばかりです。

さて、昨年の特筆する出来事として、トライやるウィークでは、初の試みとして自治協議会での体験活動を宿南地区自治協議会が引き受けることになったことです。

大人であっても、自治協議会って何をしているところ？と思われる方も多いかと思いますが、中学生の時から、地域の課題を考え、そこに住む自分達が何をしないといけないのか？何が出来るのか？ということを考えられる良い機会になったと思います。

概要については、ふるさと宿南125号（12月発行）に掲載されていますのでご覧下さい。

（宿南自治協議会のホームページにも掲載されています）

令和三年度の今後の事業としては、ポウリング大会と村民号バス旅行が計画されていますが、新型コロナウイルスの動向を見ながら、追ってご案内しますので、決行の際はご参加よろしく申し上げます。

また、宿南地区の過疎少子高齢化を緩和すべく子育て世代の移住者を招き入れる取組みとして、令和元年度から戦略的移住推進モデル事業を進めてきましたが、3年間の事業のため、令和三年度で移住コーディネーターとしてお世話になってきた森本さんの支援が終わりになります。この間、宿南地区民の有志の皆さんでスタートした4つのプロジェクトは、基本的に引き続き活動を進めていきますので、関心を持って頂ける方がありましたら一緒に参画して、他地域から移住してきたくなる魅力ある宿南地区と一緒に作っていきましょう。そのためにも、情報の発信と共有が大切だと思いますので、風通しの良い宿南地区自治協議会となりますよう、本年も皆さまのご理解とご協力を賜りますようお願いいたしますと共に、皆さまのご健勝とご多幸を祈念しまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

## 身近で見られる植物 ⑧

### ハコベ〈ナデシコ科〉

セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロと言えば、春の七草ですが、ハコベは、この中のハコベラのことです。畑や道端でもよく見られる雑草です。花は、暖かくなる3月頃から咲きます（花は4月撮影）が、越年草なので、今の時期でも見ることができます。葉の付き方は対生で、花弁は5枚ですが、1枚が深裂して2枚に見えるため10枚に見えます。ニワトリ

や小鳥の餌にも使われることか「ヒヨコグサ」とも言われ英語でもハコベを「chickweed (=ヒヨコの草)」と呼んでいます。



## 大掃除

12月12日、ふれあい隊・花水木の会の皆さん23名でふれあい倶楽部の内外をきれいにしました。

12月19日、47人参加、“あさやなぎ”のお二人によるギター&ピアノ演奏を聴き、ビンゴゲームで賞品をゲット。コロナ禍で飲食はありませんでしたが楽しい時間が過ごせました。最後に火災訓練を実施、水消火器で放水を体験し初期消火の大切さを学びました。

## クリスマス会



## 行事予定

2月26日(土)

ボウリング大会



## 草庵先生紹介

日記 35



宇都宮藩からの招きの手紙を読む草庵

宮崎和夫さん作

青谿書院を建てから5年ほど経った時だった。池田草庵に宇都宮藩（現・栃木県）から藩主の指導者として来てくれないかという招きがあった。

「宇都宮藩の岡田氏から手紙が来る。妻八鹿より帰る。夜、片山（実家・兄の家）に行く。しばらくして帰る」嘉永5（1852）年9月26日 使者の持ってきた岡田からの手紙は、現在の宇都宮藩主戸田忠明はまだ若く、その指導者として草庵にぜひ宇都宮藩に来てほしいというものであった。そして、その待遇は禄（給料）は200石、身分は用人格、子孫にも相応の禄を出すなどと破格のものだった。この時代、学問をしてどこかの藩に取り立ててもらおうというのは、学問をするものの一つの目当てでもあった。例えば、草庵の師の相馬九方は、草庵より12歳年上であったが、51歳で岸和田藩の藩需にようやく取り立てられた。九方は藩校「講習館」で斬新な教育をして注目され始めていた。九方の禄は、将来は100石も約束されていたが最初は20石であった。（梅谷卓司著「渦潮の譜」から）草庵は師のそんな情報も十分知っていただろう。40歳近くになっていた草庵も、さらなる自分の可能性を求めて新しい道へ進んでも不思議ではなかった。招きの手紙を書いたのは宇都宮藩の役人を務めていた岡田真吾である。岡田はもともと草庵の友人の春日潜庵の門人であった。潜庵の紹介で、早くからたびたび草庵とは手紙のやりとりをしていた。また、青谿書院にもやってきて、数日間書院に泊まり、草庵と対話したり講義を聴いたりするうちにますます草庵の人柄や学に敬服していた。その岡田が藩の重心たちと相談して、草庵に手紙を書いたのだった。草庵は岡田からの手紙を受け取ってから、3日後に手紙の返事を書いている。「岡田真吾氏からの手紙に返事を書いた」（嘉永5年9月29日）日記にはそれだけしか書かれていないが、迷いはなかった。返事は宇都宮藩からの招きを断るものだった。

草庵は身分や生活の安定、名声などは求めず、青谿書院で今まで通りの道を歩むことを改めて決心していた。

池田草庵先生に学ぶ会